

ふたりで過す何時間かの
贅沢な時間や空間をプレゼント

高野 てるみ さん
巴里映画・代表



撮影／本誌・坂本正行

「贈る楽しみにのめり込んじゃうと、贈られる側の迷惑や当惑なんて、つい忘れちゃって…。この秋封切りの『ギャルソン』でも、イヴ・モンタンが、有閑マダムに派手なストライプのボタンダウンをもらうシーンがあって、さりげなく忘れて立ち去ろうとするモンタンを見た時、反面教師だと思って苦笑しちゃった」と語る高野さんは、自他ともに認めるギフト・マニア。贈る口実を見つけては贈り物を探し、贈り物にいいと衝動買いしたものは部屋にあふれているとか。ブライダルの小粋なアイデアを披露してもらいました。

「最近思うのは、泡のように潔く消えてなくなるプレゼントがいってこと。別れちゃったら、なんて不穏なこと考えてる訳じゃなく、妙に存在感のあるものって、置き場に困ると思うの。特にこういうものは飽きたからって捨てられないし。だから、パーッとなくなる贅沢を贈ってあげたい。好評だったのは、新生活が軌道に乗った頃に贈った極上のステーキ肉。なかなか自分たちでは買わないだろうし、暗に、ふたりで過す何時間かの贅沢な空間をプレゼントしたつもり。忙しい人たちだから、すごく喜んでくれたけど：代わりにシヤンパンだっていいと思う。あとはあげるタイミング。結婚一周年目にさりげなく贈られるシヤンパンなんて、友だち冥利に尽きるでしょ。そういう演出をかくし味に、いつも目を光らせていて、人とは一味、二味じゃなく、三味くらい違うプレゼントがしたいわね」